

幻覚的経験についての否定的認識的な考え方

著者	横山 幹子
著者別名	Yokoyama Mikiko
雑誌名	図書館情報メディア研究
巻	12
号	2
ページ	1-12
発行年	2015-03-31
その他のタイトル	The negative epistemic conception of hallucinatory experience
URL	http://doi.org/10.15068/00124050

幻覚的経験についての否定的認識的な考え方

横山幹子*

The negative epistemic conception of hallucinatory experience

Mikiko YOKOYAMA

抄録

多くの人々は、知覚的経験の対象が心から独立したものであり、それらの対象が心に現前していると考えている。また、多くの人々は、幻覚が可能だということも受け入れている。しかし、幻覚からの議論によれば、知覚についてのそのような日常的な考え方は、幻覚の可能性と矛盾し、日常的な考え方は間違っている。けれども、選言説論者は、それらの考えを両方認めたとしても矛盾しないと論じる。彼らは、真正な知覚と幻覚の間に何らかの共通の種類のあるものを否定する。選言説によれば、その区別不可能性に関わらず、真正な知覚に含まれる心的状態は幻覚的状态とは異なる種類のものである。それゆえ、選言説論者は、幻覚的経験を説明しなければならない。幻覚的経験についての否定的認識的な考え方もその一つである。本論では、幻覚的経験についての否定的認識的な考え方の妥当性について検討する。そして、その問題を総合的に検討するための一つの基準を提案し、その基準が「非人称の理想化」の問題をどのように扱うかを示す。

Abstract

Many people think that the objects of perceptual experience are mind independent and those objects present to the mind. Many people also accept that hallucination is possible. But according to the argument from hallucination, the everyday conception of perception is incompatible with the possibility of hallucination and the everyday conception is therefore false. Yet, disjunctivists argue that the conjunction of these views is not inconsistent. They deny that there is anything of the sort common between veridical perception and hallucination. According to disjunctivism, despite the indiscriminability, the mental state involved in a veridical perception is of a different kind from the hallucinatory state. Disjunctivists therefore have to explicate the notion of hallucinatory experience. The negative epistemic conception of hallucinatory experience is one of them. This article examines whether the negative epistemic conception of hallucinatory experience is reasonable. One of the criteria for examining the problem comprehensively is proposed and it is shown how the criterion deals with the problem of "impersonal idealization".

* 筑波大学図書館情報メディア系
Faculty of Library, Information and Media Science
University of Tsukuba

1. はじめに

われわれは日常的には、知覚の対象は心から独立した外的な対象であり、心から独立した対象が心に現れている（現前している）と考えている。そして、それと同時に、知覚的間違い（錯覚や幻覚）があるということを認めている。しかし、Ayerによる錯覚からの議論¹に代表されるように、両方を認めると矛盾が生じるということはさまざまに論じられている。

Ayerの錯覚からの議論では、次のように主張される。たとえば、水に差し入れられると屈折する棒の例で見られるように、錯覚が存在するが、そのときでもわれわれは何かを知覚しており、それは心から独立した外的な対象ではない。しかし、錯覚の際に見えている曲がった棒の経験は、曲がった棒の真正な知覚的経験の場合と質的に同じである。だとしたら、真正な知覚的経験の場合も、知覚の対象は心から独立した外的な対象ではない。

もし真正な知覚の対象が心から独立した外的な対象でないとしたら、そのことは、懐疑論にもつながりうる。なぜなら、たとえば、直接知りうるのは内的なものだけで、外的な対象には間接的に気づいているだけだとするならば、なぜその間接的に知りえたものが本当の外的な対象についてのものであるかを説明しなければならなくなる。そして、それにうまく答えられないとしたら、そのことは、われわれは外的な対象について本当のことは何も知らないという考えを導きうるからである。

本論は、そのような状況のなかで、「知覚的間違いを認めたいとすれば、知覚についてのわれわれの日常的な考え方を維持したいとしたら、知覚についてどのように考えるのがより適切か」という問題の検討の一部に寄与することを目指している。

本論では、知覚的間違いのなかでも特に幻覚を取り上げ、幻覚的経験があるということを認めたいとすれば、知覚についてのわれわれの日常的な考え方を維持するための一つの方策として提案されている「知覚の選言説」²の妥当性について考察する。知覚の選言説は、「幻覚の存在と知覚についてのわれわれの日常的な考えの両方を認めると矛盾するのではないか」という問題を解決するために、「幻覚的経験と真正な知覚的経験が質的に区別できないとしても、それを説明するためにそれらの経験が、外的対象とは異なる、共通の対象についてのものであると言う必要はない」と主張する。ここでは、真正な知覚的経験と質的に区別できないとしても、真正な知覚的経験とは異なるはずの幻覚的経験をどのように説明す

るかが大きな問題となる。それゆえ、ここでの考察の具体的な目的は、「幻覚的経験の現象的特徴³は、真正な知覚的経験から反省によって⁴区別されないということだけである」とし、否定的認識的性質によって幻覚的経験を説明しようとするMartinのような考えに対する批判を検討することを通じて、否定的認識的性質によって幻覚的経験を説明しようとする立場（幻覚的経験についての否定的認識的な考え方）の利点と問題点を明らかにすることにある。

さまざまな人がその問題について論じており、問題が論じられているということは、Nudds⁵によってまとめられている。私自身、それに関する問題を限定して論じたこともある⁶。ここでは、Nuddsも参考に、問題を全体として考察し、個々の細かい議論も参照しながら、幻覚的経験についての否定的認識的な考え方を総合的に検討することを目指している。その考え方がうまくいけば、知覚の選言説による先の問題の解決は見込みのあるものになる。もしそれがうまくいかないならば、知覚の選言説により先の問題を解決するためには、幻覚的経験に関して他の説明が与えられなければならない。

その目的のために、本論では、まず、ここで考えている、知覚についてのわれわれの日常的な考えとはどのようなものかを示し、どのようにして、日常的な考えと幻覚の存在が矛盾すると論じられるのかを確認する。次に、解決の一つの方法として示される選言説がどのようなものであるかを説明する。そして、選言説での幻覚的経験の説明の一つである、幻覚的経験についての否定的認識的な考え方がどのようなものであるかを示す。それから、そのような考えに対して指摘されてきた問題を個々に整理⁷する。そして、それらを総合的に見た場合、共通して検討されなければならないことは何なのか、どのように考えたら、「知覚的間違いを認めたいとすれば、知覚についてのわれわれの日常的な考え方を維持したいとしたら、知覚についてどのように考えるのがより適切か」という問題の解決への方策として選言説が有力なものになるのかを示す。

2. 「知覚についてのわれわれの日常的な考え」と「幻覚からの議論」

私が、私の目の前のキーボードを見ているとき、私が見ているのは、私の心から独立した外的な「キーボード」という対象であり、それが私の心に現れていると考えている。そのように、知覚についてのわれわれの日

常的な考えは、「知覚の対象は心から独立した外的な対象であり、その対象が心に現れている（現前している）」と考えるものである⁸。

このような考え（素朴实在論）は、日常生活においては、ごく当たり前のことのように思える。今読んでいる本は、私の心の中にあるのではなく、外的な対象である。私が手に持っている受話器も、外的な対象である。われわれはそのように考えているからこそ、その対象について何らかの操作をしたり、その対象を他の人とやり取りしたりしていることを疑っていないのである。

しかし、そのような「知覚についてのわれわれの日常的な考え」は、幻覚の存在・幻覚的経験があるということと矛盾すると、さまざまな仕方でも論じられている。たとえば、Fish⁹は、「幻覚的経験の場合、素朴实在論は偽である」・「一人称にとっては、真正な知覚的経験と幻覚的経験は区別できない」・「区別できない経験は同じ種類のものである」・「真正な知覚的経験の場合も、素朴实在論は偽である」と定式化している。そして、それらは、「幻覚からの議論」呼ばれる。

そのような幻覚からの議論の基本的な路線は、「真正な知覚的経験と主観的に区別できない幻覚的経験を持つことは可能である¹⁰」・「主観的に区別できないならそれらは本質的に同じ種類の経験である」・「幻覚の対象は心から独立した対象ではない」・「知覚の対象は心から独立した対象ではない」と考えるものである¹¹。

3. 解決の一つの方策としての選言説

「幻覚からの議論」に反対して、知覚についてのわれわれの日常的な考えを守る一つの道は、知覚についての選言説を採用することである。選言説とは、たとえ真正な知覚的経験と幻覚的経験が主観的に区別できなくても、真正な知覚的経験と幻覚的経験に共通する本質的な要素があるとは考えず、たとえば、「私はその本を見た」という陳述を、「私はその本を実際に見たか、私はその本を見たかのように見えたかのどちらかである」という選言の短縮形だとする考えである。非選言説論者は、「私はその本を見た」という陳述が、真正な知覚の場合も幻覚の場合も、それらに共通する要素の存在によって真であるとされると考えるのに対し、選言説論者は、その陳述は、二つの陳述の選言にすぎないのであり、それらに共通する要素によって真であるとされる必要はないと考えるのである。

選言説を主張していると言われる Martin¹²によれば、幻覚からの議論は、「経験的自然主義（Experiential

Naturalism）」と「共通の種類の仮定（the Common Kind Assumption）」の両方を主張することに矛盾があるということを示している。ここで言う「経験的自然主義」とは、われわれの知覚的経験¹³が自然因果の秩序の部分であり、物理的・心理学的原因に従っているという考えであり、「共通の種類の仮定」とは、真正な知覚の際に生じる経験的出来事と幻覚の際に生じる経験的出来事が同じだという考えである。そして、幻覚からの議論から、素朴实在論（この場合は、知覚の対象はその感覚経験の構成要素であるという考え）を守るために、「共通の種類の仮定」を否定するのが、選言説なのである。Fishも、幻覚からの議論を2で見たように定式化したうえで、区別できない経験は同じ種類のものであるという考えを否定することによって、素朴实在論を守ろうとしている¹⁴。

確かに、そのように「共通の種類の仮定」を否定することによって、知覚についてのわれわれの日常的な考えは、幻覚からの議論に対抗できそうに思える。しかし、そのためには、真正な知覚的経験と幻覚的経験をそれぞれ別の形で特徴づけることが必要になる。選言説によって幻覚からの議論から知覚についてのわれわれの日常的な考えを守るためには、幻覚的経験と真正な知覚的経験に共通する本質的な要素を認めることなく、幻覚的経験を説明することが問題になるのである。

4. 幻覚的経験についての否定的認知的な考え方

4.1 制約

選言説の立場から、幻覚的経験を説明するためには、制約がある。その点を Fish は簡潔にまとめている¹⁵。

Fish によれば、その制約とは、「幻覚的経験の真正な知覚的経験からの区別不可能性と矛盾しないということ」と、「真正な知覚的経験に固有の説明を不必要だとはしないということ」である。

それらの制約が考えられるのはもつともである。なぜなら、前者に関しては、真正な知覚的経験から区別不可能な幻覚的経験があるということは、幻覚からの議論の前提であり、そのような幻覚的経験の可能性を認めたくても、知覚についてのわれわれの日常的な考えは維持できるというのが、選言説論者の議論だからである。また、後者に関しては、真正な知覚的経験に固有の説明が必要とされず幻覚的経験の説明だけで十分であるとしたら、幻覚的経験は外的な対象への依存を含まないの

で、真正な知覚的経験を説明するために外的な対象への依存が必要ないということになるからである。つまり、幻覚的経験と真正な知覚的経験の場合に本質的な共通のものがあり、それが第一義的であり、それに何かを足すことによって、真正な知覚的経験が生じるという考えにつながるからである。それは、選言説が否定しようとしていることであった。

4.2 Martinの説明⁶

4.1で見たような制約を満たすために、主体による区別が不可能だという認識的な概念を使い、幻覚的経験の特徴に、真正な知覚的経験固有の説明を余分なものとするような肯定的特徴を認めない¹⁷（「区別できない」という否定的特徴だけを認める）形で幻覚的経験を説明しようとするのが、幻覚的経験についての否定的認識的な考え方である。

そのように考えている代表的な選言論者は、Martinである。彼は、幻覚的経験は、真正な知覚的経験から反省によって区別不可能な状態であること以外の何もでもなく、肯定的特徴を持たないとしている。

Martinが問題にするのは、「因果的に一致する幻覚(causally matching hallucinations)」である。Martinは、経験的自然主義を維持しようとしている。それゆえ、われわれの知覚的経験は概して物理的・心理学的原因に従っていると考えている。その考えでは、幻覚的経験は、真正な知覚的経験の場合と同じ刺激を脳に与えることによって生じうる。したがって、「因果的に一致する幻覚」は認められることになる。彼によれば、ここでの「同じ原因・同じ結果」の原則は、弱められたもので十分である。つまり、部分的に因果的条件や非因果的条件が同じであるところで結果の類似性を要求するだけでよい。

「因果的に一致する幻覚」が認められるので、その幻覚的経験を説明することが必要になる。Martinによれば、幻覚的経験は、真正な知覚的経験が持っている対象依存という肯定的な特徴を持たない。幻覚的経験が持っているのは、それが反省によって真正な知覚的経験から区別されないということだけである。そして、そのような否定的特徴しか持たないから、たとえ真正な知覚的経験とそれと因果的に一致する幻覚的経験があり、それらに共通の性質があるとしても、それは本質的なものでも、第一義的なものでもないとするのである。なぜなら、否定的特徴しか持たないということは、真正な知覚の場合との関係から独立しては、説明されることができないということを意味するからである。

Martinの選言説の主な主張がどのようなものである

かは、彼が選言説の三つの基本的な主張として挙げていることを見ることによって、理解される。

(I) 私が今、たとえば白い杭のフェンスそのものを見ているとき、持っている特定の種類の経験のどんな事例も、もし私が白い杭のフェンスのような心から独立した対象を知覚しないなら生じえないだろうに¹⁸。

(II) 白い杭のフェンスの視覚的経験とは、白い杭のフェンスそのものの真正な視覚的知覚から反省によって区別されることのできない状態のことである¹⁹。

(III) 白い杭のフェンスについてのものであるかのようなある視覚的経験、つまり、因果的に一致している幻覚の場合、対応している白い杭のフェンスそのものの視覚的知覚から区別されないという特徴以上に、そのような経験の現象的特徴に付け加えるものは何もない²⁰。

(I) は、真正な知覚的経験が、対象依存という肯定的特徴を持っていることを示している。(II) は、真正な知覚的経験と幻覚的経験に共通する何らかの要素を認めることなく、それらの経験が現象的特徴を共有している状況を説明するために述べられているものである。また、(III) は、真正な知覚的経験とは異なり、幻覚的経験は、それが反省によって真正な知覚的経験から区別されないという以上の特徴を持たないこと、それゆえ、真正な知覚的経験固有の説明が余分なものにならないことを主張している。

5. 指摘される問題

4.2のようなMartin流の幻覚的経験についての否定的認識的な考え方に関しては、Martin自身が挙げて、彼自身がそれに対する一つの解決法を提案しているものをも含めて、さまざまな問題が提出されている。

その主なものは、以下の六つ、(1) 説明的に余分という問題、(2) 犬問題（認識的に洗練されていない主体の場合はどうなるのか）、(3) 「反省によって」の範囲の問題、(4) 区別不可能性の非推移性の問題、(5) ゾンビ問題、(6) 肯定的な認識的事実、にまとめられる。

5.1 説明的に余分という問題

4で見たように、選言説論者にとっての幻覚的経験の説明は、真正な知覚的経験の説明を余分なものにしないという制約を持っていた。そして、その制約があるのは、真正な知覚的経験に固有の説明が必要とされず、真

正な知覚的経験を説明するために幻覚的経験の説明だけで十分であるとしたら、幻覚的経験は外的な対象への依存を含まないので、真正な知覚的経験を説明するために外的な対象への依存が必要ないということになるからであった。Nuddsも指摘しているように²¹、幻覚的経験の否定的認識的な考え方は、その問題に答えるためのものである。

しかし、そのようにすることは、選言説が維持しようとしている素朴実在論と矛盾するのではないかという指摘がなされている。ByrneとLogueは“Either/Or”²²において、説明的に余分という問題について言及している。彼らによれば、真正な知覚的経験を説明的に余分にしないために、否定的認識的性質によって幻覚的経験を説明しようとするには問題がある。「テーブルの上のメガネの真正な知覚的経験の場合は、テーブルの上のメガネを取ることが出来るが、幻覚的経験の場合、メガネを取ることが出来るとは思えない」という主張はもっともであり、その意味で、真正な知覚的経験の説明が余分ではないという主張は正しい。しかし、選言説論者の場合、「説明的に余分ではない」は、本来、経験の現象的側面を説明する際に余分かどうかという問題であるはずである。けれども、経験の現象的側面と考えるならば、素朴実在論では、真正な知覚的経験の現象的側面は、幻覚的経験の現象的側面によって説明されると考えているのではないか。そのように、議論されるのである。

5.2 犬問題

否定的認識的性質によって幻覚的経験を説明することは、主体の認識を使うことである。そのため、認識的に洗練されていない主体の場合はどうなるのかという問題が指摘される。

Martin自身²³も、それが問題になると考えている。内省の力がないと考えられる犬の場合や、無頓着で真紅と朱色を分けることが出来ないような人の場合があることを認め、それを解決しなければならないと考えているのである。無頓着な人間の場合に関しては、彼は、「ある特定の人」の区別不可能性ではなく、非人称的な区別不可能性を考えることによって、問題を解決しようとする。つまり、ここで言う「非人称的な区別不可能性」とは、さまざまな欠点を持つ個々の実際の人によって区別不可能だということではなく、識別力に欠点のない「理想的な人」が眠いかか疲れているとかということのない「理想的な状態」で行ったとしても区別不可能であるということの意味する。これは「非人称的理想化」を行っ

ていることになる。しかし、彼によれば、そのように非人称的な区別不可能性を考えたからといって、真正な知覚的経験と幻覚的経験の間に共通の対象を認めなければならないわけではない。内省的判断を、現象的意識と、それを対象とするより高いレベルの自己意識と考えるのではなく、特定される現象的意識を、世界についての見方と考えることによって、何らかの共通のものを認めることなく、非人称的な区別可能性を理解できるとするのである。また、非人称的な区別不可能性は、内省の特定のメカニズムがあることを前提としないので、「犬は内省的反省を持たないのではないか」ということは問題にならない。現象的意識とそれに対するより高いレベルの自己意識という考えで内省を考えないならば、犬の場合も認識を使うことが出来るのである。犬の場合、世界への特定の態度を犬に帰することによって犬の経験について話すことが出来るのである。

この犬問題に関しては、多くの人が問題にしている。

Strugeon²⁴は、その問題に関して、Martinの非人称的な区別不可能性という考えを支持している。ただし、彼によれば、内省のメカニズムの否定だけでは問題の解決にならず、認識能力の非人称的な理想化が重要である。認識論において、非人称的理想化というのはごく普通のことであり、犬問題を避けるためには、非人称的理想化を行えばよいのである。

しかし、HawthorneとKovakovich²⁵によれば、非人称での解決は無茶な形而上学である。識別力のない人にとっては区別されていない二つの経験が、区別されることが出来るような可能世界があると考えるのは、問題があると言うのである²⁶。

5.3 「反省によって」の範囲の問題

「幻覚的経験は、真正な知覚的経験から反省によって区別不可能な状態であること以外の何ものでもなく、肯定的特徴を持たない」における区別不可能性は、反省による区別不可能性である。ここで、「反省によって」が入っている理由は、幻覚的経験の中に、内省以外の方法で真正な知覚的経験から区別できるような場合も含まれるからである。たとえば、「これから幻覚を体験してもらいます」と説明された後で、何らかの幻覚的経験が示されたら、われわれは、その証言によって、それを真正な知覚的経験から区別できるだろう。そのような場合を考慮して、「反省によって」という語が入っているのである。

Strugeon²⁷は、われわれが日常では幻覚的経験と真正な知覚的経験を区別していることを指摘し、そのこと

は、幻覚的経験の真正な知覚的経験からの区別不可能性に反するのではないかという反論を挙げたうえで、それに対する方法としての「知識の源の制限」を主張している。「反省によって」は、知識の源を制限するものである。そう考えるならば、現実到我々が日常では幻覚的経験と真正な知覚的経験を区別しているという問題は一定の解決を見る。しかし、ここには、何を「反省的」と考えるかという問題がある。彼によれば、証言の情報を反省に含まないということだけでは十分ではない。「自分の赤ちゃんの部屋のモニタをやめた後毎晩赤ちゃんの泣き声が聞こえたが、数日後、居間に行ってみたら居間のファンが回っており、幻覚の本質がわかり、自分が毎日幻覚を聞いていたのだとわかった」というような場合は、非証言的な (non-testimonial) な方法でわかるのである。しかし、そのような背景となっている信念を反省に含まないとするのは、矛盾を含む。なぜなら、背景となる知識が反省に含まなければならない場合もあるからである。白い杭のフェンスの幻覚を見ている場合、緑の野原の描写にはかかわっていないという知識は反省に含まれていなければならないのである。そのように、彼によれば、幻覚的経験についての日常と矛盾しない形で、「反省によって」をどう理解できるのかが問題になるのである。

Hawthorne and Kovakovich²⁸も、「反省によって」で排除される情報源がわからないと指摘している。私は私が白いフェンスを白として知覚していないと「反省」によって知ることができないときでさえ、「証言」によってこれを知るかもしれない。しかし、「証言によって」が排除される情報源であるとしても、それだけが「反省によって」で排除される情報源だとは思えない。「反省によって」で排除されている情報源が何か問題になるのである²⁹。

5.4 区別不可能性の非推移性の問題

4で見たように、幻覚的経験についての否定的認識的な考え方は、主体による区別が不可能だという認識的な概念を使い、幻覚的経験を説明するものであった。しかし、もし認識的な区別不可能性によって幻覚的経験の特徴が特定できるとしたら、そのことは、区別不可能性の非推移性 (a と b が区別不可能であり、b と c が区別不可能であるとしても、a と c が区別不可能とは言えないということ) と矛盾する。それは、区別不可能性の非推移性の問題と言われる。

Martin³⁰自身、区別不可能性の非推移性の問題に言及している。そして、そこでは、その問題を解決するため

に、選言説論者がとることができる方策として、二つのものが挙げられている。一つ目は、知覚 (真正な知覚) や錯覚や幻覚を区別せずに話しているのが原因だということである。経験一般についての事実は、反省によってそれらが区別されることが出来るかどうかによって述べられることが出来るが、種類の存在を基礎づけるには不十分であるとするのである。もう一つは、理想的な知覚者を考えるという方策である。

Strugeon³¹は、区別不可能性によって経験の特徴を特定することには、u と v、v と w が区別不可能であるとしても、u と w は区別可能である場合があるという、区別不可能性の非推移性の問題があるということを描いたうえで、幻覚的経験についての否定的認識的な考え方における区別不可能性の場合は、この批判は当てはまらないと論じている。彼によれば、この場合の反省的知識は、エピソードの知覚的な特徴への反省によって得られるのではなく、認識的文脈を反省することによって得られるものであるので、区別不可能性に推移性がないということは問題にならないというのである。

Farkas³²は、「同じ現れ (same appearance)」という関係は、同一性の関係であるので、推移的であればならないとしたうえで、証拠が欠けているものとして理解された区別不可能性という関係は、非推移的だとする。そして、「現れ」が同じであることと、区別不可能性の問題を分けることによって、区別不可能性が非推移的である一方で、現れが同じであることが推移的であることを説明できるとするのである。真正な知覚と対応する幻覚との関係を定義するためには、事物が異なっているための証拠が欠けているものとして理解された区別不可能性という考えを使うことは適切ではないのである。

Hawthorne and Kovakovich³³も、経験が見えにおいて同じという関係は経験の同一性を表す推移性を持つものではなく、区別不可能性は非推移的であるということを描き、Martin がそれを解決するために提出している方策を検討している³⁴。

5.5 ゾンビ問題

哲学的ゾンビとは、意識を持った人間と物理的に同一であるにも関わらず、意識体験を欠いている存在者のことである。哲学的ゾンビは、意識体験を欠いているのであるから、真正な知覚的経験も幻覚的経験も持たないはずである。しかし、哲学的ゾンビの場合も、真正な知覚と幻覚を区別できないと考えることはできる。ここに問題があると考えるのが、ゾンビ問題である。

Strugeon³⁵は、哲学的ゾンビの存在が認められるな

ら、それは、Martin 流の幻覚的経験についての否定的認識的な考え方にとって問題になると指摘している。なぜなら、意識を欠くが物理的機能的には同じであるとしたら、そのゾンビは、非人称的に区別できないという条件を満たす一方で、視覚的経験を持たないことになるからである³⁶。

哲学的ゾンビの問題に関して、Martin³⁷は、それは、現象的意識と現象的意識に対する反応である自己意識（より高いレベルにあるもの）という像を受け入れるから問題になると考える。彼によれば、因果的に一致している幻覚の場合に知覚的経験を持っていることを認めるからといって、そのような像を受け入れる必要はないのである。

5.6 肯定的認識的事実

幻覚的経験には、否定的認識的事実だけでなく、肯定的認識的事実もあると主張することによって、幻覚的経験についての否定的認識的な考え方を批判する立場もある。

Siegel³⁸は、幻覚的経験を考える際には、否定的認識的事実だけでなく、肯定的認識的事実を考えざるを得ないとして、幻覚的経験についての否定的認識的な考え方を批判している。彼女によれば、選言説論者は、「対応する」幻覚的経験がありうることを認めており、また、ソーセージの幻覚的経験の特徴がピラミッドの幻覚的経験の特徴と違うように、幻覚的経験によってその現象的特徴が違うということ認めている。だとしたら、幻覚的経験に否定的認識的事実だけでなく、肯定的認識的事実を認めなければいけなくなる。そのように、否定的認識的性質による説明は、肯定的認識的事実をどのように説明するかという問題を持つのである³⁹。

6. 考察

6.1 何が問題か

5で確認したように、幻覚的経験についての否定的認識的な考え方に対しては、さまざまな批判がなされ、議論されている。そして、それらの問題に対する取り組み方としても、さまざまな取り組みをすることができ。個々の問題に対して、相異なるそれぞれの主張を検討し、それらの相互批判のどちらが論理的に問題ないか等を検討することも、一つのやり方である⁴⁰。しかし、本論では、それらの問題を総合的に見る場合、共通して検討されなければならないことは何なのかを明らかにし、それを使い、「知覚的間違いを認めたくえて、知覚

についてのわれわれの日常的な考えを維持したいとしたら、知覚についてどのように考えるのがより適切か」という問題の解決への方策として選言説が有力かどうかを検討することを目指している。そのために、ここでは、それらの論争では何が論点となっていたかを確認し、それらの論点を総合的に検討するうえで重要な基準が何であるのかを示す。

まず、それぞれの批判の論争点がどこにあったのかを確認したい。

5.6で見たように、もし、幻覚的経験が、否定的認識的事実だけでなく、肯定的認識的事実を考えざるを得ないとしたら、そのことは、5.1で見たような、真正な知覚的経験の説明が余分であるという考えにつながる。真正な知覚的経験の説明が余分にならないための、否定的認識的性質による説明だからである。しかし、Siegelが言っていたような幻覚的経験に見られる肯定的認識的事実は、幻覚的経験にのみ見られるものと考えられる必要はない。Fish⁴¹は、持ち主のわからないバッグ自体は何ら安全を脅かすものでないにも関わらず、空港に持ち主のわからないバックがあるという性質が、警報を鳴らさせるのと同様に、Fの真正な知覚から区別できないという否定的認識的性質の説明力は、Fの真正な知覚であるという性質から引き継がれたものであると言っている。ソーセージの幻覚的経験の特徴が、ピラミッドの幻覚的経験の特徴と区別されるのは、ソーセージの幻覚的経験がその特徴をソーセージの真正な知覚的経験から引き継いでいるからだと考えられるのである。けれども、そのように考えたとしても、なぜ真正な知覚的経験と幻覚的経験を考える際、真正な知覚的経験を第一義的なものだと考えるのかという問題が残っている。

また、5.2で見たように、犬問題に関して、Martin 流の解決をするための中心的な問題は、「非人称的理想化」をどのように考えるかということである。理想化された状況での非人称的区別不可能性を認めるという立場を取るならば、犬問題に対する Martin 流の解決の妥当性は増す。しかし、もしそのような理想化された状況での非人称的区別可能性を認めない立場を取るならば、犬問題は依然として残る。ここで、問題となるのは、「非人称的理想化」を認めるような形而上学を採用するかどうかである。

5.3で見た「反省によって」を巡る問題は、日常で幻覚的経験と真正な知覚的経験を区別している事態を説明するために、「反省によって」をどのように理解するかということである。区別不可能性を主張する際に、「反省によって」で排除される情報源を特定することが

問題となる。

5.4で見た非推移性の問題も、われわれが説明しようとしている幻覚的経験は、同一性という関係に当てはめられるのか、それゆえ、推移性を満たさなければならないものなのかという問題を含んでいる。言い換えるならば、否定的認識的性質によって説明しようとしている幻覚的経験は、同一性という関係を満たすようなもの、つまり、確固たる存在者である必要があるのかが問われなければならない。

5.5のゾンビ問題に関しては、現象的意識と現象的意識に対する反応である自己意識というモデルを否定し、対象としての独立したものとしての現象的意識を否定している立場が適切なものかどうか問題となる。

では、これらの問題について検討するための基準としてどのようなものが考えられるだろうか。何らかの議論をする際は、議論をする人たちが共通の前提に立つことが必要である。たとえば、「地球温暖化を防ぎたい」という前提に立った人たちが、「通勤に自動車の使用を止め、公共の交通機関を使うということ」の適切性を考えるのであり、「地球は温暖化していない」と考え「地球温暖化を防ぐ必要はない」と考えている人たちにとっては、その意味での「通勤に自動車の使用を止め、公共の交通機関を使うということ」の適切性は問題にはならない。「もし地球温暖化を防ぎたいならば、通勤に自動車の使用を止め、公共の交通機関を使うということ」の適切かということが問題であるなら、それは、「地球温暖化を防ぎたい」という仮定の下での議論になる。本論の目的は、「知覚的間違いを認めたくえて、知覚についてのわれわれの日常的な考えを維持したいとしたら、知覚についてどのように考えるのがより適切か」の考察であった。だとしたら、「知覚についてのわれわれの日常的な考えを維持したい」ということは議論の前提であり、その議論は、「知覚についてのわれわれの日常的な考えを維持したい」という仮定の下で行われることになる。

ここで、知覚についてのわれわれの日常的な考えの維持が議論の前提（仮定）であるとしたら、知覚についての考えがその前提（仮定）と矛盾していないことが必要である。それは、「通勤に自動車の使用を止め、公共の交通機関を使うということ」が地球温暖化を防ぐということと矛盾していないことが必要なのと同じである。そのように考えるならば、先のさまざまな論点を考える際に、「その問題に関してどのように考えることが、われわれの日常的な考えと一致しているか」という基準を採用することができる。

以上のように考えるならば、幻覚的経験についての否定的認識的な考え方の妥当性について総合的に検討する際の一つの基準は、われわれの日常的な考え⁴²と一致しているかどうかということになる。

6.2 その基準はどのようにして働くのか

「われわれの日常的な考えとの一致」という基準は、どのようにして働くのだろうか。ここでは、5.2で犬問題に対する Martin 自身の解決策を確認した際に重要な役割を果たしていた「非人称の理想化」を例⁴³に考えてみたい。

Martin の考えで注目すべき点は、区別不可能性を説明する際に、「非人称的な区別不可能性」を使っていることであった。Strugeon が、認識論において、非人称の理想化というのはごく普通のことであり、犬問題を避けるためには、非人称の理想化を行えばよいと言っていた一方で、Hawthorne と Kovakovich は、非人称での解決は無茶な形而上学であると言っていた。ここで、非人称の理想化ということが、われわれの日常的な考えと一致しているかどうか問題になる。もし非人称の理想化が日常的な考えと一致しているならば、それは無茶な形而上学ではない。もし一致していないならば、それは無茶な形而上学である。もし無茶な形而上学でないなら、幻覚的経験を否定的認識的性質により説明しようとする方策の妥当性は高まる。もしその方策がうまくいくなれば、「知覚的間違いを認めたくえて、知覚についてのわれわれの日常的な考えを維持したいとしたら、知覚についてどのように考えるのがより適切か」という問題の解決への方策として選言説が有力なものになる。

非人称の理想化は、何らかの問題を解決するとき理想的な状況を想定することの一種である。だとすれば、先の問題は、「何らかの問題を解決するとき理想的な状況を想定すること」は、われわれの日常的な考えと一致するかという問題になる。

われわれは、何らかの問題を解決するとき、理想的な状況を想定しているのだろうか。これに関しては、自然科学の例が挙げられることが多いと思われる。しかし、自然科学をわれわれの日常的な考えとするかどうかは意見が分かれるところであろう。そこで、本論では社会科学からの例を考えてみる。

経済学において、「個々の証券のリスクとリターンおよび証券間の相関度についての予想と、リスクとリターンに対する選好態度を所与としたとき、個々の投資家はどのようにして最適なポートフォリオを選択すべきかの理論」⁴⁴がある。そして、「すべての投資家がこのよう

なポートフォリオ選択の理論に従って選択行動すると仮定すると、人々の最適化行動が集計された市場において、リスク証券の価格はどのように形成されている」⁴⁵のかについて論じる資本市場理論がある。リスク証券の価格の形成を予測するために、いくつかの現実には満たされない理想的な状況を仮定して、結論を導き出すのである。たとえば、そこでは、すべての投資家は危険回避的に行動するという、危険回避者の仮定がなされている。そこには、現実にはありえない理想的な状況を仮定し、そこから得た結論を我々の世界で役に立てることが出来るという考えが見て取れるのである。

そのような例を考慮に入れるとき、何らかの理想的な状況を想定し、そこで何が言われるかを見ることによって、現実の問題に答えようとする立場は、現実社会に見受けられる立場であると言うことが出来る。無茶な形而上学であるとして、非人称の理想化を捨て去る必要はない。だとしたら、「非人称的な区別不可能性」を使って、否定的認知的性質によって幻覚的経験を説明することは、われわれの日常的な考えから極端に逸脱しているとは言えない。したがって、幻覚的経験についての否定的認知的な考え方の妥当性は高まる。そして、それに伴い、「知覚的間違いを認めたくて、知覚についてのわれわれの日常的な考えを維持したいとしたら、知覚についてどのように考えるのがより適切か」という問題の解決への方策として選言説の妥当性も高まるのである。

6.3 今後の課題

「反省によって」の範囲の問題も、理想的な状況での「反省によって」を認めることによって解決するかもしれない。また、理想的な状況では、真正な知覚的経験が第一義的なものであると論じることができるかもしれない。

しかし、理想的な状況を想定するということは、現実には手にしていない何らかの状況を想定することにもつながる。幻覚的経験についての否定的認知的な考え方は、「区別不可能性」に関して、非人称の理想化をしている一方で、真正な知覚的経験と幻覚的経験に共通の何らかのものがあるという想定は拒否している。また、自己意識の対象である意識的状态というものがある存在状況や推移性を満たすような存在者として幻覚的経験も拒否している。もしこれらに関して、日常的な考えとの一致という基準で、幻覚的経験についての否定的認知的な考え方に軍配が上がるとするならば、つまり、そのような存在者の想定を拒否することが適切だと考えられるならば、そのことは、矛盾するのではないだろうか。幻覚的

経験についての否定的認知的な考え方は、その矛盾を解くことを必要とする。そして、そのためには、心理学の分野で知覚的経験や幻覚的経験の説明がどのようになされているかについての考察も必要とされるだろう。

7. おわりに

日常的な知覚についての考え方を維持する方向で、幻覚的経験を説明しようとする一つの方法として、選言説による説明を見てきた。それは、幻覚的経験についての否定的認知的な考え方になる。本論では、そのなかのMartin流の否定的認識論がどんな問題を含みうるのかを確認した。そして、問題全体を検討する際の基準として、われわれの日常的な考えとの一致に焦点を当てた。それから、その基準を「非人称の理想化」の問題に使うことによって、幻覚的経験についての否定的認知的な考え方の妥当性を検討した。そして、非人称の理想化をすることはわれわれの日常的な考えと一致すると論じ、その意味で、当該の方策の妥当性は高まると主張した。しかし、問題がなくなるわけではなかった。本論では、「非人称の理想化」は、理想的な状況の仮定、現実にはあると言えないような状況の存在を認めることを含みうるが、そのことは、「真正な知覚的経験と幻覚的経験に共通の何らかの本質的なもの」の想定を拒否するということと矛盾しうるように見えるため、当該の方策は、その矛盾を解くことが必要だということも示唆した。

もしわれわれの日常的な考えとの一致という考えを持ったうえで、「非人称の区別不可能性」を、それを想定することによって問題が解決されるからという理由で使うのだとしたら、「真正な知覚的経験と幻覚的経験に共通の何らかの本質的なもの」という考えを拒否するためには、それを想定したとしても問題が解決されないということを示す必要がある⁴⁶。想定が役に立つのか立たないのかを細かく検討するためには、心理学の分野で知覚的経験や幻覚的経験の説明がどのようになされているかについて考察する必要がある。それは、今後の課題である。

謝辞

本研究は、JSPS 科研費 25370005の助成を受けたものです。

注

- ¹ Ayer, A. J. *The Foundations of Empirical Knowledge*. London, Macmillan and Company Limited, 1958. (Ayer, A. J. (神野慧一郎, 中才敏郎, 中谷隆雄 訳) 経験的知識の基礎. 東京, 勁草書房, 1991.) 第1章参照。
- ² 現在議論されている選言説は、Hinton (Hinton, J. M. *Experiences*. Oxford, Oxford University Press, 1973.) によって論じられたのが始まりと言われるが、現在選言説と呼ばれるものには、さまざまなものがある。しかし、本論では、議論の目的上、“Disjunctivism: Perception, Action, Knowledge” (Haddock, A.; Macpherson, F. ed. *Disjunctivism: Perception, Action, Knowledge*. Oxford, Oxford University Press, 2008.) の序論で、「現象的選言説」と呼ばれ、“Either/Or” (Byrne, A.; Logue, H. “Either/Or”. *Disjunctivism: Perception, Action, Knowledge*. Haddock, A.; Macpherson, F. ed. Oxford, Oxford University Press, 2008, p. 57-94.) で形而上学的選言説と呼ばれているものに焦点を当てる。
- ³ 本論では、「現象的特徴」を、一般的に、「主体の視点からの経験の本質」の意味で使う。「現象的」は、「事物がどのように現れている (appear) か、もしくは、見える (seem) か」を示す。(“The Problem of Perception”. Stanford Encyclopedia of Philosophy. <http://plato.stanford.edu/entries/perception-problem/>, (accessed 2014-9-11). 参照。)
- ⁴ 「反省によって」は、ここでは、「自分の心的状態を調べることによって」と考えることができる。それゆえ、たとえば、「これから幻覚を見せますよ」というような、誰かの証言によって得られた付加的な情報によって幻覚的経験と真正な知覚的経験が区別できたとしても、それは、「反省によって区別されない」という条件を脅かさない。
- ⁵ Nudds, M. Recent Work in Perception: Naïve Realism and its Opponents. *Analysis Reviews* vol.69, Number2, April 2009, p.334-346. また、否定的認識的性質による幻覚的経験の説明に対していくつかの批判があることは、“The Problem of Perception”. Stanford Encyclopedia of Philosophy. <http://plato.stanford.edu/entries/perception-problem/>, (accessed 2014-9-11). や Fish, W. *Perception, Hallucination, and Illusion*. Oxford, Oxford University Press, 2009., Fish, W. *Philosophy of Perception: A Contemporary Introduction*. New York and London, Routledge, 2010. (Fish, W. (山田圭一監訳) 知覚の哲学入門. 東京, 勁草書房, 2014.) 等でも指摘されている。
- ⁶ 横山幹子. 選言主義における否定的認識論について. 図書館情報メディア研究. vol. 7, no. 2, 2009, p.19-32.
- ⁷ その際、先に触れた Nudds, M. Recent Work in Perception: Naïve Realism and its Opponents. や “The Problem of Perception”. Stanford Encyclopedia of Philosophy. <http://plato.stanford.edu/entries/perception-problem/>, (accessed 2014-9-11).、個別的問題に関して私自身が論じてきたことも参照にする。
- ⁸ “The Problem of Perception”. Stanford Encyclopedia of Philosophy. <http://plato.stanford.edu/entries/perception-problem/>, (accessed 2013-9-13). 参照。
- ⁹ Fish, W. *Perception, Hallucination, and Illusion*. 第2章参照。
- ¹⁰ 現実にもまったく区別不可能な幻覚的経験が「あった」か、もしくは「あるか」ということとは別の問題である。現実にはありえないということを根拠に幻覚からの議論を否定する方策もあるが、それについては、本論では考察しない。
- ¹¹ “The Problem of Perception”. Stanford Encyclopedia of Philosophy. <http://plato.stanford.edu/entries/perception-problem/>, (accessed 2014-9-11). 参照。
- ¹² Martin, M.G. F. “On Being Alienated”. *Perceptual Experience*. Gendler, T. S.; Hawthorne, J. ed. Oxford, Oxford University Press, 2006, p. 356-372. 参照。
- ¹³ Martin は、ここでは、感覚経験という言葉を使っている。感覚経験のなかに、知覚・錯覚・幻覚のそれぞれの経験が含まれるという術語の使い方をしている。本発表では、そこでの「感覚経験」にあたるものを「知覚的経験」とよび、「知覚」は「真正な知覚」と呼んでいる。それゆえ、引用以外では、本論での術語の使い方に統一する。
- ¹⁴ Fish, W. *Perception, Hallucination, and Illusion*. 第2章参照。
- ¹⁵ Fish, W. *Perception, Hallucination, and Illusion*. 第4章参照。
- ¹⁶ Martin, M.G. F. “On Being Alienated”. p. 356-372. 参照。
- ¹⁷ たとえば、「区別できない」ではなく、「しかじかの本質を持つ」のような肯定的な形で幻覚的経験を説明するならば、その本質の共有によって真正な知覚的経験も説明されることになりえ、両経験の説明としてはその本質の共有で十分だと考えられるからである。
- ¹⁸ Martin, M.G. F. “On Being Alienated”. p. 357.

- ¹⁹ Martin, M.G. F. "On Being Alienated". p. 363.
- ²⁰ Martin, M.G. F. "On Being Alienated". p. 369.
- ²¹ Nudds, M. *Recent Work in Perception: Naïve Realism and its Opponents*. p.337-338. 参照。
- ²² Byrne, A.; Logue, H. "Either/Or". p.83-87. 参照。
- ²³ Martin, M.G. F. "On Being Alienated". p. 373-399. 参照。
- ²⁴ Sturgeon, S. *Reflective Disjunctivism*. Supplement to the *Proceedings of the Aristotelian Society*. vol. 80, 2006, p. 195-198. 参照。
- ²⁵ Hawthorne, J.; Kovakovich, K. *Disjunctivism. Supplement to the Proceedings of the Aristotelian Society*. vol. 80, 2006, p. 164-167. 参照。
- ²⁶ 私自身は、「選言主義における否定的認識論について」で、「理想化された非人称的区別不可能性」という形而上学を認めるかどうか、この問題を解く鍵になるが、現時点ではどちらの立場も決定的な根拠を持たないと指摘した。
- ²⁷ Sturgeon, S. *Reflective Disjunctivism*. p. 208-210. 参照。
- ²⁸ Hawthorne, J.; Kovakovich, K. *Disjunctivism*. p. 161-164. 参照。
- ²⁹ 私自身は、「選言主義における否定的認識論について」で、「証言による情報の排除」という考え方で、「反省によって」をかなりうまく説明できるのではないかと論じた。
- ³⁰ Martin, M.G. F. *The Limits of Self-Awareness. Philosophical Studies*. Vol. 120, 2004, p.74-81. 参照。
- ³¹ Sturgeon, S. *Reflective Disjunctivism*. p. 198-204. 参照。
- ³² Farkas K. *Indiscriminability and the Sameness of Appearance. Proceedings of the Aristotelian Society*. vol. 106, 2006, 224-226. 参照。
- ³³ Hawthorne, J.; Kovakovich, K. *Disjunctivism*. p. 167-173. 参照。
- ³⁴ 私は、「選言主義における否定的認識論について」で、「非個人的な視点の導入」で非推移性の問題が解決できるとは限らないと論じた。
- ³⁵ Sturgeon, S. *Reflective Disjunctivism*. p. 204-207. 参照。
- ³⁶ この問題が成立するのは、知覚と幻覚を区別できないにもかかわらず知覚的経験を持っていない場合を認める場合である。それを認めるかどうかも議論されるべきである。(横山幹子. 選言主義における否定的認識論について. 参照。)
- ³⁷ Martin, M.G. F. "On Being Alienated". p. 373-379. 参照。
- ³⁸ Siegel S. "The Epistemic Conception of Hallucination". *Disjunctivism: Perception, Action, Knowledge*. Haddock, A.; Macpherson, F. ed. Oxford, Oxford University Press, 2008, p.218-223. 参照。
- ³⁹ この点に関しては、Martin のものに直接関係してではないが、私自身、考察したことがある。(横山幹子. 選言主義、幻覚、区別不可能性：Fish の提案. 図書館情報メディア研究. vol. 8, no. 2, 2010, p.15-27. 参照。)
- ⁴⁰ 私自身、「選言主義における否定的認識論について」や「選言主義、幻覚、区別不可能性：Fish の提案」等では、その手法を採用している。
- ⁴¹ Fish, W. *Perception, Hallucination, and Illusion*. p. 89. 参照。
- ⁴² ここでの「日常」には、日常生活の中での営みであるならば、学問的な抽象作業も含まれる。
- ⁴³ もちろん、5で扱った他の五つの問題に関しても、それぞれ「われわれの日常的な考えとの一致」という基準がどのように働くかを見ていく必要がある。日常において真正な知覚的経験を幻覚的経験と比べて第一義的なものと考えているのか、日常では「反省によって」でどのような情報源が排除されているのか、日常では推移性を満たすような同一性という関係が成り立つものとして幻覚的経験が考えられているか、日常では独立した対象としての現象的意識を捉えているかどうか等々が考察される必要がある。しかし、ここでは、「非人称的理想化」だけを取り上げた。なぜなら、この例が「われわれの日常的な考えとの一致」という基準の働き方がわかりやすいものだと考えたからである。もちろん、一つの例しか考察していないため、ここで言えるのは、「知覚的間違いを認めたいとすれば、知覚についてのわれわれの日常的な考えを維持したいとしたら、知覚についてどのように考えるのがより適切か」という問題の解決への方策として選言説の妥当性が高まるということだけである。妥当性をより高めていくためには、他の五つの問題に関しても、同一の基準でどのように考察できるのかを考えていかなければならない。それは今後の課題である。
- ⁴⁴ 榎原茂樹；青山護；浅野幸弘. 証券投資論. 第三版. 東京, 日本経済新聞社, 1991, p. 164.
- ⁴⁵ 榎原茂樹；青山護；浅野幸弘. 証券投資論. 第三版. 東京, 日本経済新聞社, 1991, p. 164.
- ⁴⁶ Putnam は、知覚の場合にインターフェースを持ち出す考えが、われわれの知覚作用をよりよく説明しているかどうかについて考察していた。(Putnam, H. "Sense, Nonsense, and the Senses: an Inquiry into the Powers of the Human Mind". *The Threefold Cord: Mind,*

Body, and World. New York, Columbia University Press, 1999, p. 1-70.) また、新川拓哉は、どのような実体を認めるかという問題に言及し、選言説の主張が、表象説と比べて存在論的に有利であると論じている。(Niikawa, T. Naïve Realism and the Explanatory Gap, *An Anthology of Philosophical Studies*, vol. 7, 2014, p. 125-136.) それらの考えは、今後の検討の参考になると考える。

参考文献

- Ayer, A. J. *The Foundations of Empirical Knowledge*. London, Macmillan and Company Limited, 1958. (Ayer, A. J. (神野慧一郎, 中才敏郎, 中谷隆雄 訳) 経験的知識の基礎. 東京, 勁草書房, 1991.)
- Byne, A.; Logue, H. "Either/Or". *Disjunctivism: Perception, Action, Knowledge*. Haddock, A.; Macpherson, F. ed. Oxford, Oxford University Press, 2008, p. 57-94.
- Farkas K. Indiscriminability and the Sameness of Appearance. *Proceedings of the Aristotelian Society*. vol. 106, 2006, 207-227.
- Fish, W. *Perception, Hallucination, and Illusion*. Oxford, Oxford University Press, 2009.
- Fish, W. *Philosophy of Perception: A Contemporary Introduction*. New York and London, Routledge, 2010. (Fish, W. (山田圭一監訳) 知覚の哲学入門. 東京, 勁草書房, 2014.)
- Gendler, T. S.; Hawthorne, J. ed. *Perceptual Experience*. Oxford, Oxford University Press, 2006.
- Hawthorne, J.; Kovakovich, K. *Disjunctivism*. Supplement to the *Proceedings of the Aristotelian Society*. vol. 80, 2006, p. 145-183.
- Haddock, A.; Macpherson, F. ed. *Disjunctivism: Perception, Action, Knowledge*. Oxford, Oxford University Press, 2008.
- Hinton, J. M. *Experiences*. Oxford, Oxford University Press, 1973.
- 榊原茂樹; 青山護; 浅野幸弘. *証券投資論*. 第三版. 東京, 日本経済新聞社, 1991.
- Martin, M.G. F. *The Limits of Self-Awareness*. *Philosophical Studies*. Vol. 120, 2004, p.37-89.
- Martin, M.G. F. "On Being Alienated". *Perceptual Experience*. Gendler, T. S. ; Hawthorne, J. ed. Oxford, Oxford University Press, 2006, p. 354-410.
- Niikawa, T. Naïve Realism and the Explanatory Gap, *An Anthology of Philosophical Studies*, vol. 7, 2014, p. 125-136.
- Nudds, M. *Recent Work in Perception: Naïve Realism and its Opponents*. *Analysis Reviews* vol.69, Number2, April 2009, p.334-346.
- Putnam, H. *The Threefold Cord: Mind, Body, and World*. New York, Columbia University Press, 1999. (Putnam, H. (野本和幸監訳) 心・身体・世界: 三つの撚り糸/自然な実在論. 東京, 法政大学出版局, 2005.)
- Putnam, H. "Sense, Nonsense, and the Senses: an Inquiry into the Powers of the Human Mind". *The Threefold Cord: Mind, Body, and World*. New York, Columbia University Press, 1999, p. 1-70.
- Siegel S. "The Epistemic Conception of Hallucination". *Disjunctivism: Perception, Action, Knowledge*. Haddock, A.; Macpherson, F. ed. Oxford, Oxford University Press, 2008, p.205-224.
- Sturgeon, S. *Reflective Disjunctivism*. Supplement to the *Proceedings of the Aristotelian Society*. vol. 80, 2006, p. 185-216.
- 横山幹子. 選言主義における否定的認識論について. *図書館情報メディア研究*. vol. 7, no. 2, 2009, p.19-32.
- 横山幹子. 選言主義、幻覚、区別不可能性: Fish の提案. *図書館情報メディア研究*. vol. 8, no. 2, 2010, p.15-27.
- "The Problem of Perception". *Stanford Encyclopedia of Philosophy*. <http://plato.stanford.edu/entries/perception-problem/>, (accessed 2014-9-11).

(平成26年 9 月29日 受付)

(平成27年 1 月6日 採録)